



■ 巻頭言

新しい診断情報の開拓を目指して

石田良雄

関西労災病院 核医学診断部・循環器内科 (国立循環器病センター客員部長)

「 ^{18}F -FDG PETによる心サルコイドーシスの診断」に対する保険診療が、ようやく平成24年4月から承認されることとなった。 ^{18}F -FDG PETの心疾患への適用では心筋 viability 評価に次ぐもので、その臨床的価値が広く認識されたことが背景にある。著者らは、1992年に最初のケースを報告して以来、症例を重ねその有用性を検討してきた。日本核医学会へ、保険診療の承認に向けた行動を要請した経緯もある。しかし、承認までに20年間の歳月を要したことになる。核医学関係者にとっては、癌診断において false positive となる ^{18}F -FDG のサルコイド病巣への集積に対して、その診断応用を認めるには抵抗があったようで、同意を得ることがなかなか難しかった。しかし一方、循環器の臨床では、心サルコイドーシスは病変が局在するために心筋生検による組織診断が難しいことから、高感度に病巣を描出できる ^{18}F -FDG PET への期待が非常に強かった。その結果、最終的には日本循環器学会が主導する形で、このたびの保険診療の承認に漕ぎ着けたわけである。日本では心サルコイドーシスへの取り組みの歴史はとても古く、その成果として、日本で作成された診断指針が欧米で使用されている事実がある。したがって、今回の ^{18}F -FDG PET の診断応用についても、世界をリードする形で発展してゆくことに期待したい。

^{18}F -FDG PETによる心サルコイドーシスの診断のケースのように、心臓核医学にとっては、他の手法では獲得できない価値ある診断情報を開拓することが、発展の重要な鍵だと思う。

心エコー法の研究のメッカであった阪大第一内科を母教室とし、その中で主流ではない心臓核医学の研究に従事することになった私は、同僚の心エコー研究者と競い合う形で、核医学固有の新しい診断情報の開拓を目指してきたような気がする。その努力の果てに、心音 II 音同期・心電図 R 波逆同期による左室拡張機能解析法、Radial Long-axis Tomography によるブルズアイ表示法などの新しい画像処理法を開発したが、覚えておられる方がいるだろうか。その後数年が経って、これらは米国からもっと洗練されたプログラムとして提供されることとなり、私にとっては少し苦い思い出でもあるのだが。そして、国立循環器病センターに赴任してからは、心筋生化学イメージング (SPECT/PET) の隆盛期と重なり、種々の心疾患への応用の中から、診断に有益な生化学情報の抽出に力を尽くした。その成果は、2010年に「心臓核医学の実践的応用—症例と解説」(メディカルビュー社)にまとめたので、機会があれば一読いただきたい。この中で、実に様々な提唱を行ったが、その一つである「 ^{18}F -FDG PETによる心サルコイドーシスの診断」は、強い臨床的ニーズを背景に、保険診療の承認にまで漕ぎ着けたわけである。

核医学は極めて潜在能力に優れた診断技術である。このたび私は第9代の日本心臓核医学会理事長に就任したが、若い世代がさらに新しい診断情報の開拓に挑戦していただくことに最大の期待を寄せ、その活動を少しでも支援したいと考えている。

Nuclear Cardiology Official Journal of JSNC. Contents

●巻頭言「新しい診断情報の開拓を目指して」	1P
■特集 1. 心臓核医学：リスク評価から個別化医療へ	2～9P
■特集 2. 心臓血管イメージングと放射線被曝	10～15P
■心筋 SPECT ソフトウェア紹介 No1. Dyssynchrony を読む	16～23P
■心臓核医学技術	24～25P
■学会印象記	26P
■学会賞受賞	27～29P
■心筋 PET の保険適応拡大	30～31P
■JNSC2013 の紹介	32P
■学会賞・学会賞技術部門 募集のご案内	33P
■若手研究者奨励賞 募集のご案内	34P
■編集後記	35P